

YMFg

2025 VOL.12

from
北 山
九 島
州 県

LOCAL
ISSUE

この世界で。この街で。このじぶん。

街を起こす

(awaken)

大人も子どももタウンシップ | 萩発、ネオ・バーマカルチャー
見たことのない道の駅 | お寺は楽しい!

他社は、 他者ではない。

人類は、物語を共有することで繁栄してきた。
いかなる不運も協力し乗り越えた。
ひとりでは、人類になれなかった。

いま、企業はどうか？
難題を前にしたとき、差し伸べる手はあるか？
共に考える、別の頭はあるか？

2025年、Growth Partnersはそのために生まれた。
我々にとって、他社は、他者ではない。
あしたを共にするパートナーズ。
当事者になることを強みに、同じ船に乗る。

企業もひとりでは、社会になれない。

同じ船。
同じ運命。

GP
Growth Partners YMFG

YMFGが思い描く「地域の豊かな未来」を共有するために、この街に存在する、あしたを託したい、あしたを照らしてほしい人や取り組みを紹介します。

三都には、街を
目覚めさせる人がいます

【北九州】

P06

大人も子どももタウンシップ
わが手で街を編み直す

【山口県】

P12

萩発、ネオ・パーマカルチャー
未来をつくるゆるい循環

【広島県】

P18

見たことのない道の駅
再生の軌跡と新たな物語

お寺は楽しい！

P11 北九州 | 長玄寺

P17 山口県 | 雲林寺

P23 広島県 | 久蔵寺

P24 YMfgのあした考 第7回
[文化発のビジネスを、もっと育てる]

連載

P26 あしたのランチ何食べる？
[北九州] 田舎庵 / [広島県] 冷めん家 /
[山口県] そば居酒屋 たべ山

P27 わたしを変えた住空間

P28 三都の雑貨物語

P29 ラブレター from 下北沢

P30 YMfg あした新聞



COVER

PHOTO_ 西山 勲

けん玉ゆいちゃん (中村 結)

2009年、山口県萩市出身。小学1年でけん玉を始め、翌年未成年の最高位である「けん玉道5段」を取得。小学6年の時に、全国大会にて日本一に
かがやく。けん玉の教室やショーを行う実力者。デン
マークのけん玉メーカー〈KROM〉のジャパンチーム
所属。将来の夢はプロゴルファー。

一人の先生との出会いが
私のけん玉人生の始まりでした

小学校にけん玉があって、みんなでけん玉対決
をすると私が一番できなかったんです。でもでき
ないから楽しかったし、負けず嫌いを発揮して勝
つまでやりたいとなったのかもしれませんが。さらに
けん玉に夢中になったのは原田祐紀先生との
出会いからです。先生がイベントでけん玉ショー
と検定大会を両方やっていて、はじめて参加し
た時に10級の賞状をもらいすごく嬉しかったこ
とを覚えています。先生に「次も頑張ったらもっ
と上の賞状をもらえるよ」と言われて、その帰り
にけん玉をほしいと親にお願いしました(笑)。
ただ山口県内には木のけん玉がなくて…人生
初の木のけん玉は原田先生がくれたものでし
た。今でも大切にしています。(ゆいちゃん)

可能性を広げ未来をひらくけん玉の魅力とは？
公式 Instagram 限定記事もお楽しみに。



街を起こす



どんなに豊富に資源があったって、それだけではにぎわいも彩りも生
まれません。そこにはやっぱり人の手が必要で、想いの重なりが大
切で、経済の循環が不可欠で。人がいるから街がかがやく。当たり
前のように聞こえるけれど、実はとても難しいこと。人と街とが心地よ
く響き合うために、私たちができることって何でしょう。今回の特集で
は、街の文化を翻訳し、新しい力を起こす人々のまなざしを辿ります。

撮影当日はゆいちゃんのけん玉仲間も集合。日本の伝統的な「けん玉
道」と「ストリートけん玉」の世界から幅広く人が集まり、にぎわいました。

(awaken)



お話を聞いた人

「黒崎96の日」実行委員会会長
タウンシップスクール 公長
池本綾女さん

黒崎を中心にさまざまなまちづくり活動に従事。現在は、市民、地域、企業を紡ぐソーシャルコネクターとして活動。持続可能な新しい地域コミュニティの形を探索している。

黒崎を職場にして
いる人、思い入れが
ある人、かつて住
は、決して住民だ
けのものではない。
黒崎を職場にして
いる人、思い入れが
ある人、かつて住

「これまでいろいろな形で市民活動に関
わってきた実感したのは、思い入れの強い少
数の人が引っ張るよりも、たとえモチベーシ
ョンの大きな立
場の違いがあつて
も、その人なりの
手法でゆるく多
くの人がつながっ
ていく方が続くこ
うです」
タウンシップ
は、決して住民だ
けのものではない。
黒崎を職場にして
いる人、思い入れが
ある人、かつて住

自主的にイベントを実現できるように尽
力。59歳から大学院で学び、タウンシッ
プについて論文を書くに至った。下澤政宏
さんは転勤でやってきたこの土地で、郵便
局長というスキルを生かして、「黒崎96の
日」で発注の統括を務め、今では実行委員
長に。

取材した誰もが背景にこのようなエピソードを持っている。街の活性化を考える時、黒崎から感じるの希望と課題の両方だ。希望は「二人ひとりとは特別な人々たちではなく、このように動くことができる」ということ、そして課題は「黒崎では多くの人たちがのびのびと活動ができ、なぜ他の地域ではこれが起きにくいのか」ということ。次ページからの14人の言葉の中から、その秘密の一端が垣間見えてくる。

WHAT'S タウンシップ？

どうしたら「自分の街」と
思える？

小倉地区に続く、北九州の副都心と呼ばれる、北九州市八幡西区黒崎地区。かつて日本の高度成長期にもつくりを推進する工場地帯として、さらににぎやかな商店街がある商業地区を持つ街として発展してきた。そして現在。日本全国で進行する人口減少に伴う街の空洞化は、ここ黒崎地区も例外ではない。

ところが黒崎には、自分たちの手で街を編み直そうとしている人たちがいる。彼らのキーワードは「タウンシップ」。Town(街)とFriendship(友情・絆)を組み合わせた造語で、主体的に街に関わり続けるためのマインドを表現している。どうすれば「自分の街」だと思えるか。さまざまな活動のハブになっているタウンシップスクール公長の池本綾女さんは、こう話す。

自分なりのやり方で
ゆるく力を発揮！

タウンシップの表れ方は、人によってさまざま。今回14人も市民のみなさんに話を聞くことができたが、どの人も自分で考え、自分ができる方法を提示し、そして肩の力を抜いて関わっていることに驚かされる。池本さんが「タウンシップ精神は、言葉で説明するよりも、実際に関わっているみなさんに会って理解できると思います」と笑って話してくれたことを実感する。

「黒崎96の日」だ。毎年9月6日に、市民が自ら知恵を絞り汗を流し、企業は協賛や運営の部を担当し、商店は抽選会の賞品を提供する。そしてみんなが街の真ん中に集い、「かんばーい！」と自分たちの街の記念日を祝っている。



2025年の「黒崎96の日」には、みんなで街に絵を描く、チョークアートが行われた。



9月6日は、北九州市八幡西区黒崎地区にとって特別な日だ。「黒崎96(くろ)の日」＝「タウンシップデー」を、「黒崎を盛り上げるための、住む人・働く人、みんなの記念日」として制定し、毎年多くの人たちが祝う。商店街アーケードの路上で、街に乾杯するために集まるのは、なんと2500人を超える人々！2025年で10回目を迎えた「黒崎96の日」を入口に、街の人々をつなぐキーワード「タウンシップ」について取材した。

PHOTO_ 勝村祐紀 TEXT & EDIT_ 浅野佳子

黒崎地区とは

江戸時代、長崎街道の宿場町として発展。大正から昭和にかけて、〈安川電機〉や〈黒崎窯業(現黒崎播磨)〉などの大工場の進出で活況を呈す。戦後は黒崎駅を中心とした放射状に商店街が広がりにぎわいを見せたものの、現在は大規模店舗の撤退により、駅前の活性化が課題。"北九州市の副都心"として、魅力あるまちづくりを模索している。



北九州市

わが街は、
わが手でつくる。
それが黒崎の
タウンシップ

街を起こす「北九州」

黒崎のタウンシップは、トップダウンではなくボトムアップ。しかも各々の人の中で、それぞれ違う形をとっている。黒崎の街づくりに関わる14人の、「これがわたしのタウンシップ」を聞いた。

これがわたしのタウンシップ



「個性×個性が、
ハーモニーを生む」

宇治野貴士さん
福岡県警察OB 「黒崎96の日」スタッフ、合唱部

合唱部に入ったのは、ハーモニーが心地いいから。みなさんと顔が見える関係性になって、警察が何を守っているのかわかるようになりました。



「ちよこっと
バブリックが心地よい」

松田悠志さん
岡田神社神職 合唱部・マップ部

街づくりは義務じゃありません。タウンシップスクールには、楽しみながら無理なく街づくりに関われる機能があるんですよ。



「人がいるところ、
郵便局あり」

下澤政宏さん
八幡熊手郵便局 「黒崎96の日」実行委員長 マップ部

郵便局という仕事柄、地域との関わりを持つことは使命なのですが、街に出て人と関わって初めて、その本当の意味がわかりました。



「こちらが手伝うから、
自然と手伝ってもらえる街」

伊藤ゆき子さん
カフェシナモンオーナー 「黒崎96の日」実行委員 マップ部

たとえ興味関心が違ってても、「あの時お世話になったから手伝おう」という持ちつ持たれつの関係が、たくさんの人との間にあります。



「黒崎を原動力に、
世界を舞台に」

谷口靖さん
株式会社安川電機 「黒崎96の日」副実行委員長

世界を舞台に優れた仕事をするので、「いい会社が地元にある!」と誇りに思ってもらうことが、企業ができる地域への恩返しの一つです。



「自分の地元で
希望を持つことが、
底力につながる」

大和四穂さん
黒崎播磨株式会社 「黒崎96の日」実行委員

「企業だって地域の構成員である!」ことに気づけるのが「黒崎96の日」。黒崎播磨にとって、黒崎の街にあることも企業価値の一つです。



「街を歩くと、
人と出会うよろこび」

福岡忍さん
保育士・カフェ勤務 合唱部

家族や友だちと幼い頃から楽しんだ街で大人になり街づくりに参加。人脈形成ができて出会ったことのない世界が広がりました。



「街づくりを通じて、
友情が芽生える」

武智充さん
AIR STATION HIBIKI(株) 合唱部部長

結果が出ても出なくても、やり続けていると自然と人が集まってきます。ずっと街のことを考えていますが、これが一生続くんでしょうね。



「最終的には、
人間関係」

首藤啓さん
福岡県警察 「黒崎96の日」スタッフ、合唱部

警察は困った時に相談を受ける仕事。ふだんから人間関係が構築できていると、いざという時、ポジティブな解決に近づける気がします。



「仕事は、いろんな
自分の中の一部分」

向井明さん
ホテルクラウンパレス北九州 「黒崎96の日」副実行委員長

ホテルを代表して参加していますが、みんなができることを持ち寄って街と関わる時、仕事以外の自分も活発になっていることに気づきます。



「誰もが自分の
住んでいる街に
プライドがある」

丹生谷雅俊さん
株式会社エコルにぶや 「黒崎96の日」副実行委員長

この活動を通じて、住んでいる街にプライドを持っている人が大勢いることに気づき、すっかり街を見る目が変わりました。



「街を活性化
させたい思いよ、
もっと広がれ」

中西享嗣さん
株式会社ニコウ 「黒崎96の日」実行委員

思いのある人に刺激を受けて巻き込まれ、すっかり泥沼です(笑)。仕事以外の知り合いが街にいて、いいものですよ。

北九州
長玄寺



若い世代に
もっとお寺を開きたい
本格的な怪談話の
読み聞かせが
この地域の夏祭り

「チーン」。お鈴の音が響くと、騒いでいた子どもたちが静かになる。「今宵は、お寺のこわ〜いこわい怪談会によこそいらっしゃいました」。子どもたちの前で怖い声音で語りかけるのは、僧侶の谷川のぞみさん。テレビ局でリポーターを務めながら、毎年本堂で怪談話、その名も「テラコワ」を行っている。お寺の子供として生まれ、お寺に嫁いだ谷川さんが、コロナ禍で急激に進んだお寺離れを食い止めたとい始めた「テラコワ」。最初は怪談話のみだったが、現在では妖怪縁日や妖怪仮装コンテストなどの催しが同時開催され、今年で4回目を迎える。「日本の文化を伝えつつ、子どもたちに非日常感を楽しんでもらえたら」。それにしてもデザインや企画があまりに本格的な理由を尋ねると「私自身が妖怪が大好きなんです」と笑う。バイタリティあふれる谷川さんが、妊娠出産から産後間もない頃は、社会から断絶されたような漠然とした孤独を感じていた。そのタイミングで改めて気づいたのが、お寺の存在意義。「地域の中にこれだけの広いスペースがあるのは貴重です。核家族化が進んで孤独を感じている人たちが多く、集える場としてもっと地域に開く方法を考えようと思いました」。春の花まつりには、

お寺は楽しい！

ゆめかわいいイラストを使ったフラワーアートマルシェ、定期的にベビーヨガも行っている。共通するポップな見た目は、若い人にお寺に興味を持ってもらいたいという気持ちの表れだ。集まっている子どもたちと若い家族の姿に、その思いが言葉にしくなくても通じているのを感じた。



夜の本堂でこわ〜い話を聞けるお寺
福岡県北九州市小倉北区原町2-7-6
Instagram : @chogenji_kitakyushu

仏教の信仰の場であるお寺が今、カルチャースポットとしても注目を集めています。
奥深すぎる世界の扉、開いてみる？

PHOTO: 勝村祐紀 TEXT & EDIT: 浅野佳子



毎月集まって練習をしては、街のさまざまな催しに出かけ、歌う。この合唱部は、サードブレイスであり、大人の部活。歌が上達すること以上に、「街と関わる」のが重要なミッションだ。「街づくり」と聞いて何をすればいいかわからなくても、合唱を通して街への思いを表現すると考えると、急にできることが見えてくる。街の合唱部として、オリジナルソング「わがまちくろさき」は、必ず歌う。部員は随時募集中。来たれ、愛ある初心者！

Instagram : @kurosakitownshipschool

黒崎の街には、タウンシップ・マインドが表れた団体やイベントがたくさんある。その中から2つをピックアップしてご紹介。

大人も子どももタウンシップ！



子どもが職業体験できる、いわばキッズニア的な取り組みだが、働く企業や商店がローカルなのがユニーク。〈北九州銀行〉や〈スターフライヤー〉、〈小倉記念病院〉や近所の菓子店など、ふだんから子どもたちにも親しみのある企業が参加している。子どもたちの「やってみよう！」という気持ちを育むと同時に、地域の未来を担う人材を育てる試みとして、多くの黒崎人が手伝っている。

今年も開催！ こども商店街

小倉 — 2025年10月25日 9時〜17時

黒崎 — 2025年11月8日 9時〜17時

Instagram : @kodomo_shotengai

街すべてがステージ

タウンシップスクール 黒崎まちの合唱部

「街で歌う」合唱は
心と地域を紡ぐ架け橋



私がプロデュースしています

飯田知津子さん 合唱部講師

合唱は一人では完成しません。仲間が増えたと無限の可能性と多彩なハーモニーが広がるんです。

自分の街で働くイメージを

黒崎こども商店街

「自分が街のまんなかだ」



私が企画・運営しています

田中大士さん 人形の田中社長
こども商店街実行委員長 マップ部部长
商店街に店を構えるという仕事柄、自分が一番街を知っているという自負があります。街を自分ごととして考えているんです。



以前はIT企業に勤めていた石田夫妻。二人三脚で自然農に取り組む。

ゆるい循環 だからこそ 続けていける

東日本大震災後、都会での子育てに疑問を感じるようになった洋子さん。自然豊かな場所でも暮らしたいと考え始めた頃、古民家との運命的な出会いが。「母が萩の出身で、知人の空き家を紹介してくれて、「一目見て「ここだ!」と思いました」。

2017年、神奈川から萩へ。石州瓦の家が立ち並ぶ美しい街並みと、多くの幕末志士を生んだ浪漫あふれる地。手探りで農業を始め、農泊を受け入れるようになると、萩の文化をシェアする価値や、土を触ることの大切さに気づいた。そして萩の魅力を伝えるリトルプレス『つぎはぎ』を創刊。大切に受け継がれるつぎはぎだらけの衣のように、萩の魅力をまとめてつぎはぎ、次の世代へつなげたいという想いを込めた。〈つぎはぎ農園〉の名もここから来ている。

「移住前はトマトが夏野菜ということすら知らなかった」と話す洋子さんだが、2023年には柑橘栽培で新規就農。循環型の自然農と、人と自然がともに豊かになる手法・パーマカルチャーを学び、在来種の栽培や農体験の提供にも力を入れている。さらには蔵を改装して民泊を経営。「つぎはぎ」の制作を機にフリーペーパー専門店も始めた。「農業も人生も楽しむことが大事。アナログな方法を押しつけないわけでも、現代的なものを否定したいわけでもないんです。それだけじゃずっと続かない。自分に合った循環のつくり方を、萩の暮らしの中に見出してもらえたらなって」。取材中も、夫の征大さんや思春期真っ盛りのお子さんと愛のある小競り合いを繰り返していた洋子さん。飾らず、無理せず、ありのままの豊かさをシェアする生き方には、新たなパーマカルチャーの種が芽吹いていた。



土壌が本来持つ力で育てた野菜は、色ツヤがよく、生命力に満ちた濃い味わい。

日本中の多種多様なフリーペーパーが自由に手に取れる。棚は征大さんのお手製。

街を起こす「山口県」

飾らない萩の暮らしを伝える ネオ・パーマカルチャー

北は日本海、東は島根県に面し、豊かな自然に恵まれた山口県萩市。市の中心部から20分ほど車を走らせた先に、石田洋子さん・征大さん夫妻が営む〈つぎはぎ農園〉がある。自然農を実践する傍ら、民泊やフリーペーパー専門店の顔も持つ農園が伝えたい「萩の暮らし」とは。お話を伺うと、人と自然と文化との無理のない共生バランスが見えてきた。

PHOTO_勝村祐紀 TEXT_片桐絵都 EDIT_後藤麻与



農家ごはん 火のある暮らしを 楽しむ農泊



萩市の農泊はサイクリングや萩焼の窯元見学などプログラムが盛りだくさん。受け入れ家庭の〈つぎはぎ農園〉では旬の魚や採れたての野菜を使った家庭料理をふるまう。「全然、特別なものじゃないです」と洋子さんは話すが、シンプルな中に萩ならではの味わいを感じられる。通気性のいい古民家はその分寒さも厳しく、薪ストーブと薪風呂は冬の風物詩。薪を燃やした後の草木灰は畑にまいて土壌改善に活かすほか、増えすぎる竹を燃やして竹炭づくりも行っている。

料理上手から 郷土料理の 味を教わる



ふぐといえば下関のイメージが強いが、実はその多くは萩の船が漁獲したもの。しかもマフグに関しては萩が全国一の水揚げ量を誇り、ふぐ処理師の免許を持つ漁師の妻も多いのだとか。〈つぎはぎ農園〉では、ふぐさばき・料理体験を提供する「はぎまえ698」と連携。「身欠き」と呼ばれる皮と内臓を取り除くさばき方や、種類による毒の部位の違いを教えてくださいと、萩ならではの体験が楽しめる。もちろん、ふぐ刺しやふぐちりの試食も。

モデルコース

DAY 1

- 17:00 〈つぎはぎ農園〉チェックイン
- 17:30 周辺を散歩
- 18:00 農家ごはん
- 19:30 〈道の駅阿武町〉で温泉
- 22:00 就寝

DAY 2

- 8:00 種取りなどを行う朝の畑活の後、朝食
- 10:30 〈はぎまえ698〉のふぐさばき・料理体験
- 13:30 笠山を散歩
- 15:30 〈大屋窯〉で庭やギャラリー見学&萩焼選び
- 17:30 萩のソウルフード〈どんどん〉で夕食
- 19:30 〈つぎはぎ農園〉に戻り薪風呂時間
- 22:00 就寝

DAY 3

- 9:30 〈浜料理がながん〉で漁師飯の朝食
- 10:30 〈萩しーまーと〉で土土産探し
- 11:30 〈yuQuri〉で昼食のパンを買う
- 12:00 〈中原木材〉アトリエ見学
- 14:30 〈八千代酒造〉蔵見学&試飲。ツアー終了

SPOT DATA : Instagram 道の駅阿武町: @michinoekiabu
はぎまえ698: @hagimae698 / 大屋窯: @ooyagama_ceramics
どんどん: @dondonsunada / 浜料理がながん: @hamaryourigangan1230
萩しーまーと: @seamart33 / yuQuri: @hagi_yuquri
中原木材: @nakahara_mokuzai / 八千代酒造: @yachiyo1887

※各スポットは事前予約・営業日確認が必要です。

移住の参考になる
暮らし体験ツアーも
やっています！

萩の暮らしを“つぎはぎ”して 未来につなげる

〈つぎはぎ農園〉発 ライフスタイル体験



農園では農業や化学肥料は用いず、地元産米のみ穀や米ぬか、落ち葉を発酵させた自家製肥料を使用する。虫も雑草も排除せずに生態系を保ちながら、夏みかんやブルーベリー、大豆、トマト、ナス、バジルなど、多種多様な作物を育てている。そんな自然農の畑で季節に応じた農体験のプログラムを実施。収穫した野菜や果物は持ち帰ることも、母屋で調理してランチや夕食として堪能することもできる。地元の人はもちろん、移住を検討している家族にも人気だ。

自然農の畑で 地元の人と畑活



農園で育った作物を活用し、暮らしの知恵が学べるプログラムも。大豆から味噌をつくったり、レモン生姜麹や梅シロップを仕込んだりと、田舎ならではの手仕事体験できる。母屋の庭にあるアウトドア用の窯で焼き上げるのは、生地からトマトソースまで全て自家製のピザ。ちなみに征太さんは俳優の山田孝之さんが主宰するコミュニティ「原点回帰」のメンバーで、無人化した島の再生にも携わっている。「メンバーとの交流が新たな手仕事体験を生むきっかけにも」と洋子さん。

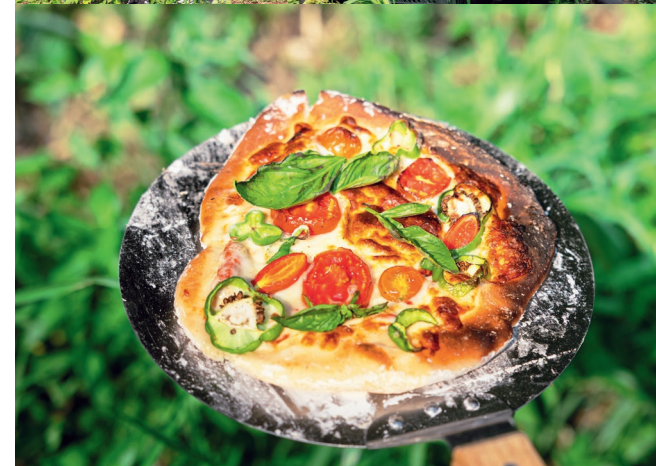
自然の恵みを味わう 手仕事体験



昔ながらの 竹紙&竹細工を学ぶ



日本で4番目に竹林面積の大きい山口県には、竹を使った伝統的な手仕事が残る。例えば竹紙。竹を切って発酵させ、繊維を取り出して叩き、半年以上水につけた後に紙漉きし、乾燥させると、温かみのある独特な風合いの紙になる。〈つぎはぎ農園〉では、この竹紙を使ったランプシェードづくりや、地元作家と提携して竹箆などを編む竹細工体験を提供。豊かな資源でありながら竹害のリスクを併せ持つ竹を、地域の中で循環させることで文化としてつないでいる。



山口県
雲林寺



ニヤンと！
総数1000点超え
猫愛あふれる
魅惑の聖地へ
ようこそ

「もともとは犬派だったんですよ。しかも戌年生まれ」と、ふんわり笑う住職の角田慈成さん。言葉とは裏腹に猫のイラスト入りTシャツがよく似合う。雲林寺は猫にまつわる伝説を持つ天樹院の末寺で、世界中の猫好きに愛される通称・猫寺。しかし1996年までは無住寺院で、今のような姿になるとは住職自身も想像していなかったそうだ。転機となったのは、知人の形見分けで招き猫のコレクションを30体ほど譲り受けたこと。玄関の棚に飾っていると、猫好きたちが思い思いの品を奉納するようになった。「ここにいた方がみなさんに可愛がってもらえるから」「自分が亡くなった後に処分されるのは忍びない」などの理由が多いという。現在、寺の猫コレクションは1000点を優に超える。地元のチェーンソーアーティスト・林隆雄さんが手がけた彫刻も見どころで、「猫かぶり」と呼ばれるお面は被らずにはいられない。Tシャツやお守りなどのオリジナルグッズも充実。遊び心たっぷりのイラストは全て住職と妻の寛子さんが描いている。さらに毎年7月には猫を含む生き物の供養祭を無償で行っていて、今年は約800匹を供養した。猫の魅力を尋ねると「猫って変わるんです」と住職。4匹いる寺猫のうちの1匹・アウアウは

お寺は楽しい！

気性が荒かったが、プーという愛らしい子猫との早すぎる別れを経験し、性格が一変。今では人懐っこい看板猫として訪れる人を笑顔にしているそうだ。人間よりもしなやかに生きるかよい存在に目頭が熱くなる。雲林寺が愛される所以は、慈愛に満ちた学びがあるからかもしれない。



住職夫妻のキュートなセンスにハマる猫寺
山口県萩市大字吉部上2489
Instagram: @neco.dera

仏教の信仰の場であるお寺が今、カルチャースポットとしても注目を集めています。
奥深すぎる世界の扉、開いてみる？

PHOTO- 勝村祐紀 TEXT- 片桐絵都 EDIT- 後藤麻寿



暮らしづくり業を
営む私たちが
やってます

石田洋子さん
Instagram: @tsugihagin

中村龍太郎さん
Instagram: @aramonya.meguru

網屋友美子さん
Instagram: @naturalstore.seedoflife

子どもたちの選択肢を
広げるための活動

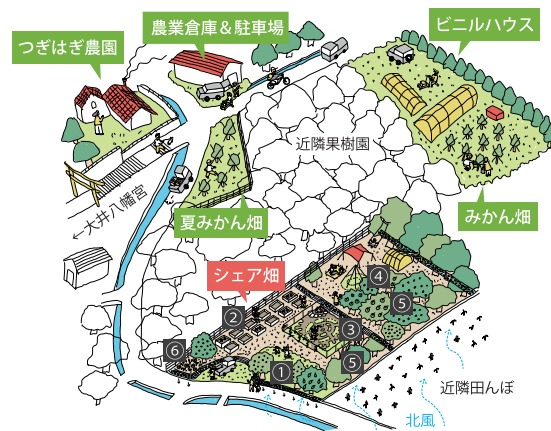
ジム代わりに
畑で汗を流すのが
普通の時代に

地域の素晴らしい技と
知恵を伝えたい

萩の種を芽吹かせる「発芽の会」のこと

洋子さんはこの春、自然とともにある暮らしを伝える「発芽新聞」を立ち上げた。編集部メンバーは、自然食品店「シードオブライフ」を営む網屋友美子さんと、竹細工職人であり（暮らしの荒物屋めぐる）店主の中村龍太郎さんだ。萩出身の網屋さんは東京でブライダルの仕事をしていて、父親がガンを患ったため帰郷。自身も体調を崩し、健康と食について深く考えるようになった。中村さんは学生時代に仙台で東日本大震災を経験し、日常はいつも簡単に崩れるものだ実感。人生の舵は自分で取りたいとインテリアデザインの会社を辞め、東京から萩の隣の阿武町に移住した。ライターとして執筆を担当するのが洋子さん、誌面のデザインを手がけるのが中村さんで、中村さんいわく「スーパー営業マン（笑）」の網屋さんが持ち前の「ミニケーション力」と人脈を駆使して取材対象者への交渉役を担う。3人の共通点はパーマカルチャーを学んでいること。それぞれ捉え方や実践方法は違えど、萩の豊かさを未来につなげたいという想いは一致している。

新聞の創刊にあたり「発芽の会」も発足。〈つぎはぎ農園〉の畑の近くの2区画を借り上げ、「発芽畑」という名のシェア畑として種まきや収穫をともに行うコミュニティである。発芽畑は絶賛整備中で、「子どもの遊び場」会員の畑「みんなの畑」「休憩エリア」「果樹エリア」「花畑エリア」の6つのゾーンで構成される予定。裸足で遊べるように樹木で日陰をつくり、「乾燥→中間→湿潤」といった多様な環境をつくれる螺旋状のハーブガーデンを設けたりと、随所にパーマカルチャーの思想が活きている。「ストイックにパーマカルチャーをやろう」ということではなく、自分のペースで楽しんでもらうのが目的」と洋子さん。中村さんは「僕もコンビニに行くし、ポテチだって好き。だけれどたまには美味しい野菜を食べるとか、選択



肢が自分の中に1個あるだけで人生は広がる。その選択肢を与えるのが「発芽の会」と話す。「萩は自然に恵まれ、素晴らしい技術と知恵を持った方がたくさんいらっしゃる。それを共有して残していく場にもなる」と網屋さん。地元の人には「ここには何もなかった」とよく口にするという。「でもそれは違う。余計なものがないだけ」と中村さん。網屋さんも「3人とも違う土地での暮らしを経験したからこそ、萩のよさに気づけるのかも」と頷く。さらに中村さんは「環境にいいことをしよう」としても1人の力は微々たるもの。それよりも「発芽の会」の活動を通して、豊かな暮らしを最初から知っている子どもを増やしていく方が大きな力になるのでは」と続ける。最後に洋子さんは「つぎはぎ農園」と同じく、「発芽の会」が目指すのは無理のない循環。土に触れると生きる力が湧いてくる。ジムで体を鍛えるように畑で汗を流すのが普通の時代になったらいいですね」と微笑んだ。



高東浩昭さん

広島県三原市出身。〈マツダ〉で働いた後、農業の世界へ。農業コンサルタントなどを経て、2013年より〈道の駅 よがんす白竜〉の経営を引き継ぐ。

駅長の高東さんに聞く

「見たことのない道の駅へ」の挑戦ストーリー



“三原市民に誇りに思ってもらえる存在に”

経営を引き継いだ当初、ヒト・モノ・カネ・情報・ノウハウといった経営資源が全くなかったという高東さん。「ゼロからというよりマイナスからというてもいいほどで、知恵と工夫で乗り切るしかない状況です。施設の床や棚をDIYしたり、閉店した商店へ設備機器を譲り受ける交渉をしに行ったり。そんなことを繰り返していました」。同時進行で力を入れたのが、道の駅ブランドの確立だ。「よがんすが存在感を示すには、他にはない体験価値を提供することが重要。そこで、おどろき・よろこび・くつろぎ」をテーマに掲げて取り組んでいきました」。

まずガストロノミアの考え方を採用し、よがんすでしか味わえない食の価値を高めること。地産食材とイタリア料理の融合を目指し、ナポリ産の石窯を導入して地域の特産を使った薪窯焼きピッツァを提供。産直市場や特産品売り場でも、地産食材の他にハムやワインなどイタリアの輸入食材を増やした。「そうした取り組みで少しずつ認知度が上がり、引き継いだ3年後には来場者が10倍になりました。ただ立ち上げより続けることが大切で、自社農園での野菜や酒米の栽培、日本酒づくりや自社商品の開発と、さまざまなテーマにチャレンジしてきました」と高東さん。「今後も地域外へと広がる活動を中心に取り組み、三原市民の方によがんすを誇りに思ってもらえるようにしたいです。一方で、日用品が揃う地域のインフラとしての役割についても考えるようになりました。広い視点で中山間地域における経済体系のモデルとなるような取り組みをしていきたいです」。



見たことのない道の駅へ



広島空港からほど近い三原市大和町に位置する〈よがんす白竜〉。白竜湖の湖畔に行む洋風建築が周囲の緑に美しく映える道の駅だ。今でこそ人気だが、現駅長であり〈よがんす白竜〉代表の高東浩昭さんが経営を引き継ぐ前は、さびれた印象の場所となっていた。「なんとか道の駅を再生して中山間地域の現状を改善したい」と縁あって経営を担うことになった高東さん。そこからこの道の駅再生へ向けての物語がスタートする。

PHOTO_ 鷲崎浩太郎 (一部、よがんす白竜提供)
TEXT_ 住田茜 EDIT_ 福津くるみ

〈よがんす白竜〉の変化の軌跡

街を起こす「広島県」



こんな道の駅は見たことない！見どころ5選

4

自家栽培米

〈YOGANSU FARM〉で栽培している米は、イタリア米「カルナローリ」と日本米「北陸204号」をルーツに持つリゾット専用米の品種「和みりゾット」。これが日本酒の原料米となります。酒米としてはこれまでにほぼ使用されたことのない珍しい品種ですが、よがんすの原点である“地産とイタリアの融合”を実現していくためこの品種の栽培に取り組んでいます。ワインの「テロワール」のように、三原の豊かな自然環境の中で単一の田んぼで丁寧につくっていくことを大切にしています。



私、高東が
紹介します！



5

YOGANSUの酒

「ワインのテロワールと同じように、原料である米にまでこだわった酒づくり」という思いで始まった日本酒づくり。三原の老舗酒蔵「酔心山根本店」さんに相談して、よがんすオリジナルの日本酒が誕生しました。「和みりゾット」本来の風味を楽しめるよう精米歩合90%で醸しています。田んぼの番地がそのままブランド名になっており、沖田9241番地で収穫した米でつくる「OKITA9241」、川挟8259番地で収穫した米でつくる「KAWABASA MI8259」の2種類があります。



1

道の駅

（産直市場&特産品売り場）

産直市場では、大和町の特産品であるレンコンをはじめ地域の農家が育てた旬の野菜や果物、レストランでも使用するイタリア産の輸入食材などを販売しています。また特産品売り場には、地域の特産品でもあるハトムギ製品や銘菓、ワイン、自社オリジナルブランド商品の日本酒や冷凍ピッツァ、ジェラートなどがラインアップします。一般的な道の駅ではなかなかお目にかかれないものが、〈よがんす白竜〉にはあります。お客様に驚きを感じてもらえるような場所を目指しています。

2

YOGANSU FARM

よがんす白竜の経営当初から大切にしていることが“食”です。地産食材とイタリア料理を融合させた食事をレストランで提供しており、“ここでしか味わえないもの”を追究するうちに農業にたどり着きました。三原市内にある自社農園（YOGANSU FARM）では米や野菜を栽培しています。育てた野菜は産直市場で販売する他、レストランでは一部食材として活用。米は日本酒づくりに使用しています。ファームでの野菜や米づくりももちろん私たちスタッフが担っています。

3

レストラン

産直市場や特産品売り場に併設しているレストランです。イタリア・ナポリ製の薪窯を取り寄せ、私自身がナポリピッツァの知識と技術を習得して、新鮮な地産食材とイタリアの食材をたっぷり使った薪窯焼きピッツァの提供を始めました。国産やイタリア産の小麦粉、天日塩、大和町の水を使って焼き上げるこだわりの一枚を多くのお客様に知っていただくことができ、今ではパスタやメイン料理、デザートなども提供しています。平日限定のランチセットも人気です。

道の駅 よがんす白竜

広島県三原市大和町和木652-3
 営：9:00～17:00（土日祝～18:00）
 ※レストランは10:00～17:00・L.O.16:00
 （土日祝～18:00・L.O.17:00）
 ランチタイムは平日のみ11:00～14:00
 休：第3木曜、12/31～1/3
 ※第3木曜が祝日の場合、振替
 TEL：0847-35-3022
 山陽自動車道・三原久井ICから車で約20分



広島県
久蔵寺



コンセプトは
“現代の寺子屋”
子どもから大人まで
遊んで学んで
楽しい場づくり

原爆で従業員を亡くした企業が、犠牲者を追悼するために1946年に建てた寺院が〈久蔵寺〉。原爆犠牲者のために戦後新たに寺院が建立された例は国内でもあまりなく、そうした寺の歴史と平和への願いを伝える取り組みなども行っており、地域の人がいっしょに訪れることができる、人とつながる場づくりが行われている。佐竹英信さんが住職に着任したのは2015年。時代とともに変わる寺としての在り方を考えるなか、改めて“地域とつながる場所であることが寺の大切な役割”だと確認したという佐竹さん。「2019年から“現代の寺子屋”というコンセプトのもと、お寺が遊んだり学んだり楽しく過ごせる場となるよう取り組んでいます。ヨガや英会話、親子アート、育児サークルなど、地域で活動する先生がそれぞれ教室を開催しています。活動の前にはみんなで読経のおつとめを行うのがお寺らしい点ですね」。例えば「おてらde造形あそび」では、小学校低学年までの子どもたちが住職と一緒に本堂で読経した後、のびのびと絵を描いたりつくったモノを見せ合ったりしながら楽しく過ごしている。今では、その教室の開催日数はなんと月20日ほどにもなるそう。どの教室も私たちだけではできないことで、地域の方に支えてもらってできています。

お寺は楽しい！

遊びや学びといった楽しい時間はもちろん、困っている方もここにくれば楽しいと思ってもらえる場所にしていきたいです。お寺の最大の強みであり弱点でもある“場所が動かない”という点を生かして、家庭や学校、職場とはまた違う新しい場所にお寺がなればと思っています。



遊びや学び、人とつながるサードプレイス
広島県安芸郡府中町茂陰1-13-21
Instagram : @kyuzojiorizuru

仏教の信仰の場であるお寺が今、カルチャースポットとしても注目を集めています。
奥深すぎる世界の扉、開いてみる？

PHOTO_中野一行 TEXT_住田茜 EDIT_福澤くるみ



チーム
づくりも
大切に
も

スタッフが答える〈よがんす白竜〉の魅力。 “推し”の理由はココ！

水がきれいな周辺地域でつくられる農産物がどれも美味しく、自社で開発している冷凍ピッツァや日本酒、ジェラート、肉の加工品などもおすすめです。売り場に立っていると、お客様から「この前食べて美味しかったよ」「こんな商品初めて見た、すごいね」という声をよく聞きます。「見たことない道の駅」がコンセプトの施設なので、他にはないそうした体験が提供できていることが嬉しく、またそこにあるお客様の笑顔を見ると自分も誇りに思います。



販売
小松杏子さん

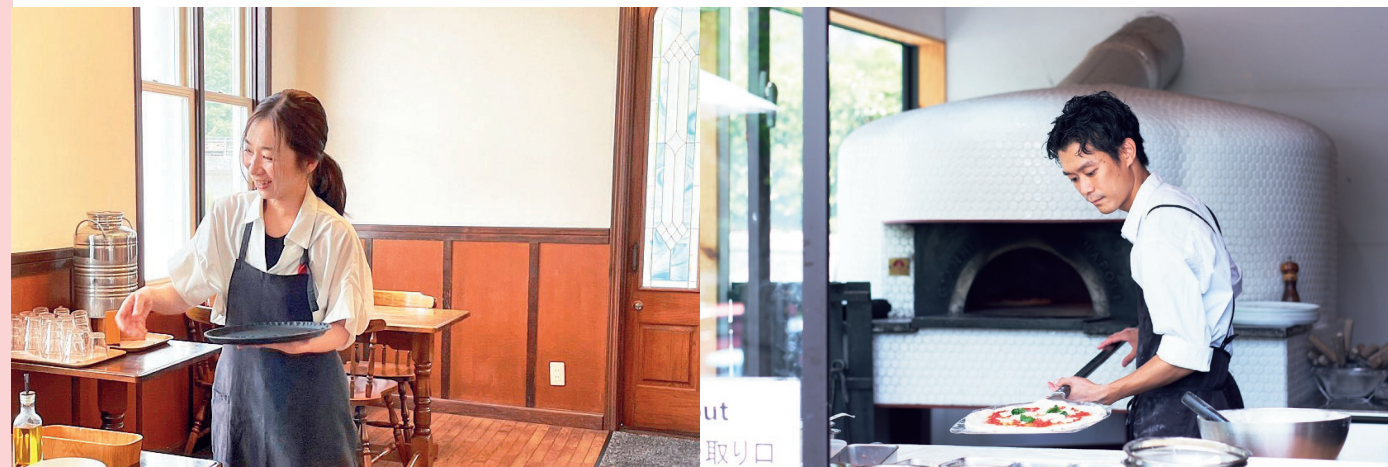
本物を突き詰めるパワーを
持っていることが魅力です

お客様の喜びの声や笑顔が
誇りになっています



〈道の駅 よがんす白竜〉
副駅長 関本侑介さん

レストランには本場・ナポリから届いた薪窯があります。それを生かす技術と地域ならではの新鮮な食材でつくるピッツァをはじめ、メニューはどれも絶品です。ありふれたものをそのまま提供するのはなく、アレンジを加えてここでしか体験できないものへと形を変えて提供するという、社長を筆頭にスタッフ全員が本物を突き詰めるパワーを持っていることが大きな魅力。その熱意やこだわりをSNSも活用しながら広く伝えて、よがんすを盛り上げていきたいです。



第7回 「文化発のビジネスを、 もっと育てる」

「カルチャー」と「ビジネス」が融合するポイントで大切なものは？
実際のカルチャープレナーにご登場いただきながら、それらの企業にYMFGメンバーがどのように伴走しているかを聞きました。

TEXT_ 浅野佳子
ILLUSTRATION_ 堀内えりか



現代的な方法を
駆使しながら
熊野筆の価値を
上げていく。

土屋武美さん【株式会社晃祐堂】

日本一の筆の産地である広島県安芸郡熊野町で、熊野筆の技を受け継ぐ化粧筆ブランド。伝統技術に現代的なデザインを融合させ、高品質な筆作りを行っている。

（カルチャー
プレナーに
聞いてみた）

Q. 熊野筆に、どのような可能性を感じていますか？

2026年に、書道がユネスコ無形文化遺産に登録される可能性があると言われていいます。日本国内だけでなく、全世界に書道文化が広まることで、書筆はもちろんその流れを汲む化粧筆の理解も深まるのが予想されます。それまでに、地場産業を通して、「筆」の足元をしっかりと固め、その価値を上げていきたいと考えています。

Q. 金融機関からどんなバックアップがあるといいですか？

私たちの仕事は、経済的価値と社会的価値の両輪を回してこそ持続可能なビジネスとなります。日本文化を守るという意味で、短期的な利益ではなく、長期的な成長を長い目で見る体制があれば嬉しいですね。

檜皮葺ひわだぶきを
継承するために、
1000年続く
企業を築く。



佐々木真さん【有限会社ひわだや】

天保年間から、檜皮葺の伝統を受け継ぎ、神社仏閣の屋根を手仕事で守り続ける専門の工房。代表の佐々木真さんは山口県内唯一の檜皮葺師でもある。

（カルチャー
プレナーに
聞いてみた）

Q. 文化を事業にする企業として、どんなことに取り組みたいですか？

守るべきもの（国宝や重要文化財等）を守り、新しくつくるもの（伝統技術を活用した新しい価値）を増やしたいと考えています。例えば、文化財未指定の建造物について登録を提案できるような知識と行動力のあるチームをつくったり、檜皮葺の工程そのものに価値を見出し、観光資源として世界に発信したり。いろいろできることがありそうです。

Q. 檜皮葺は、どんな可能性を持っていますか？

自社内で、洗練された形での建築やプロダクト、体験等の発信が可能となりました。近年のインバウンドの増加やラグジュアリーホテル建設ラッシュなどのタイミングを逃さずキャッチしたいですね。

私が紹介します



山口銀行 山口ブロック

中尾達朗

なかお・たつろう／「これらの銀行は、定量評価だけでない評価基準を持ち、企業が本来持つ価値を見つけ出すことも仕事」

みなさんは、檜皮葺をご存じでしょうか。ヒノキの樹皮を材料に、それを重ねて屋根をふく日本独自の伝統的な屋根工法で、神社仏閣に多く用いられています。有限会社ひわだやは、なんと1830年代天保年間から檜皮葺を続けておられる、山口県唯一の企業です。

佐々木社長は自ら現場に立ち、文化財の改修に長期にわたって取り組んでおられます。改修事業は数年から十数年に及ぶこともあり、しかも檜皮の採取から施工まで一貫して担うのが同社のやり方です。現在、山口市にある国宝「瑠璃光寺五重塔」が70年ぶりの令和の大改修の真っ只中で、そこでもひわだやが活躍してい

ると聞くと、現代社会と時間の流れがまったく異なっていることに気がかされます。そのようなタイムスパンを持つ企業であるため、「材料調達難の難しさ」「長い改修周期による収入の波」「後継者不足」など、課題はさまざま。そしてこれらは一事業者が単独で解決できるものではありません。だからこそ、私たち金融機関や地域と一緒に、価値を発見し、地域の資産として発信していくことが必要です。

ひわだやでは、檜皮葺の関係人口を増やす取り組みも盛んです。伝統の世界に触れる入り口としてワークショップを実施したり、また世界的なハイブランドのショップの内装材に採用されたりと、日本を飛び出してその価値を知る人たちも増えています。

檜皮葺は屋根を直すための技術ではありません。建物に込められた時間や人々の気持ちを未来へつなぐ営みでもあります。この仕事を続けていくことが、まさに文化を事業として継承しようとするカルチャープレナーの実践そのものだと思っています。

私が紹介します



もみじ銀行 海田ブロック

高橋勇次

たかはし・ゆうじ／「これからの地方銀行は、企業のサービス同士をつなげ、メガバンクやネット銀行にできないことに取り組むことが必要！」

のものを未来へ接続するためには、どのような手段をとるかに、とても自覚的に見えます。この視点があつてこそ、伝統的な筆がより活躍の場を広げることができるといいます。

一方で、もちろん課題も少なくありません。原材料となるリスやイタチの毛は国際的な動物保護の流れで入手が難しくなり、価格は10年で10倍ほど高騰しているそうです。経営を直撃する深刻な問題でありながら、業界全体では横のつながりが弱く、解決策が「社ごとにとどまってしまう状況にあると聞きました。だからこそ、私たちのような外部の視点や金融機関の橋渡しが必要で、共通課題を地域全体で乗り越えていくことが必要だと感じます。

熊野筆は熊野町の象徴で、町の文化的な支柱でもあります。晃祐堂が取り組むのは、単なる新商品の開発にとどまらず、伝統を現代に翻訳し、文化を継承するための新たな試みです。熊野から、これまで考えなかったような筆の可能性が生まれたらいいなと思うながら、仕事を一緒にさせていただいています。



わたしを 変えた 住空間

理想の暮らしを求め、
三都へ移住した人々を訪ねました。



岩本成矢さん
(30代・(DECORATE COMPANY)代表)

- 横浜出身。東京のWeb広告代理店を経て、2019年に北九州市の門司港へ
- 移住のきっかけは、門司港でドライフラワー店の起業を検討する知人からSNSで相談を受けたこと。現地の魅力を知った上でマーケティングの実践がしてみたいと、縁もゆかりもない門司港を新天地に決める

Instagram :
@seiya_iwamoto / @shiki.mojiko

港町ならではの空気感

観光客や移住者など、さまざまな人が行き交う門司港。「空気によどみがなく、ラテン的なムードが好きです」

静かで稀な時間の流れ

周囲の路地は車通行不可。「〈四稀〉のコンセプト「季節を感じる空間で稀な時間を」を体現する静かな立地」

思考が広がる空間

レンガや竹材など元の素材を生かしつつ、家具は造作。「大きなテーブルや高天井が思考の広がりを生み出す」

もっと手触りのある仕事がしたかった。生きていると感じられる仕事。門司港へは一度訪れただけで移住を決めた。故郷の横浜が持つ空気感に似ていたからかもしれない。マーケティングパートナー事業を立ち上げ、登記すら残っていない築100年以上の古民家をリノベして、カフェ兼オフィス〈四稀〉をオープンした。僕もいつもここで仕事をしている。日付が変わるまでいることもしばしば。実際の住まいよりも住まいのような場所だ。

移住してすぐの頃はタワマンに住んでいた。東京より安い家賃なら住んでみたい! という単純な理由。でも、豊かかってそういうことじゃないとわかった。今も〈四稀〉の窓からそのタワマンが見える。門司港に来てよかったのは、人生を考え直せたこと。そして、もっともっと手触りのある仕事がしたいと思うようになったこと。

For The Better

タワマンの後に3年住んだのは住まいのサブスク「ADDRESS」の家。家守(管理人)として多様な人と出会い世界が広がった。写真は次の家守へ引き継ぐ会にて。



山口県



山口FG
カスタマーサービス部
山口結加里

シンプルなのにやみつきになる 〈冷めん家〉の広島冷麺

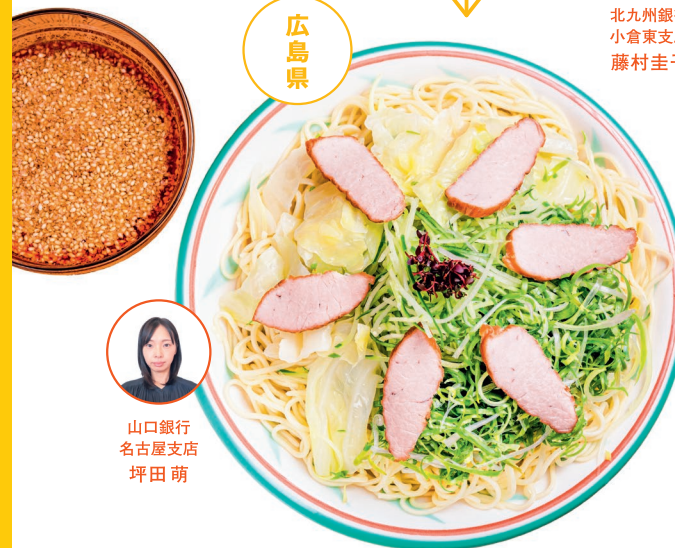
辛いタレにつけて食べる冷麺(つけめん)は広島のスoulフード。こちらは県内で二番目に古い広島冷麺のお店です。大将に辛いものが苦手と伝えると、「辛くせんのもあるよ」とマイルドなタレを出してくださったのですが、通うごとに大将が辛さを足していき、気づけば徐々に食べられるように(笑)。辛味の中に広がる旨味、山盛りのシャキシャキの野菜とツルツルとした麺がベストマッチ。名古屋にいる今も無性に食べたくなるので、通販で買っています。先日、久々にお店に伺ったら大将が亡くなられたと知り、ご挨拶できなかったことが悔やまれます。でもご家族が元気に営業されていてホッとしました。ずっと続いてほしいお店です。

広島冷麺 1,150円(税込) 広島市中区大手町2-4-6
営: 11:00~L.O.13:50/18:00~L.O.20:50
休: 土、日、祝

広島県



山口銀行
名古屋支店
坪田 萌



YMFG社員がリアルに通うランチの名店をご紹介します。今回ピックアップしたのは、他県の人にもつい自慢したくなる3店。街の魅力を底上げする絶品メニュー揃いです。

PHOTO_ 岩原俊一(山口)、小原実(広島)、萩原博(北九州) TEXT_ 片桐絵都 EDIT_ 天季恵

ジビエの概念を覆す 〈そば居酒屋 たべ山〉の 鹿肉ステーキ丼

地元の俵山温泉では昔から猪や鹿がよく獲れ、家庭でジビエを食べる習慣があります。こちらは2020年にオープンしたお蕎麦屋さんで、この辺でジビエが食べられる唯一のお店。実家で集まりがあった際、たまたまこちらのお弁当を頼んだところ、その美味しさに感動。以来、帰省のたびに親子三代で訪れるのが我が家の定番となりました。必食なのが、ヒレ肉を使った「鹿肉ステーキ丼」。獲れてすぐに処理された新鮮なお肉なので、やわらかくて臭みは全くありません。普段ジビエに慣れていない私の子どもたちも、いつも喜んで食べます。俵山の自然が育んだ豊かな味。ぜひ温泉と一緒に堪能してみたいかがでしょうか。

鹿肉ステーキ丼 2,300円(税込) 長門市俵山5110-1
営: 11:30~14:00/17:00~21:00 休: 火、水

北九州



北九州銀行
小倉東支店
藤村 圭子

ご褒美ランチはここで決まり! 〈田舎庵〉のせいろ蒸し

1926年創業の〈田舎庵〉は、小倉出身の私にとってはお馴染みの存在。母もこちらの鰻が大好きで、ちょっと贅沢な気分が味わいたい時に二人で訪れます。決まって頼むのは「せいろ蒸し」。せいろで蒸された鰻は驚くほどふっくらしていて、タレは甘すぎず辛すぎず、とっても優しいお味。鰻にしっかりと脂がのっているの、濃すぎないバランスがちょうどいいんですよね。ご飯は多めと少なめを選ぶので、私も母も多めを選びます。山椒を振るとさらに美味しく、う巻きもおすすめの一品です。最近は海外のお客さんも増えて行列必至。開店30分前に行って名前を記入しておくのがベターです。

せいろ蒸し(竹) 4,070円(税込)
北九州市小倉北区鍛冶町1-1-13
営: 11:00~L.O.20:00 休: 無休(年末年始・春秋連休等除く)

あしたのランチ何食べる?

What will you have for lunch tomorrow?

ラブレター from

下	北	沢			



「尾道を心のふるさとしてくれたのは映画という共通言語」

尾道といえば、数々の名作が生まれた映画人憧れの地。今回、タイムリープが題材の『リライト』を監督するにあたり、大林宣彦監督の「尾道三部作」へのリスペクトを込めて広島県尾道市で撮影しました。穏やかな風と、幾筋にものびる細い道。かけえのない時間を閉じ込めたような街には、40年以上前に撮られた『時をかける少女』のノスタルジーがそのまま残っていました。

尾道港を望む〈千光寺〉、元銭湯の居酒屋〈大和湯〉、生口島いくちじまの〈瀬戸田高校〉など、どのロケ地にも思い入れがあります。尾道唯一の映画館〈シネマ尾道〉では、撮影でお世話になっただけでなくロングラン上映までしていただいて。ロケ地以外で通ったのは海鮮居酒屋の〈みち草〉。「終わったら〈みち草〉が待ってる」がスタッフ間の合言葉でした。あ、サウナ好きとしては〈ぼっぱの湯〉も外せない。Tシャツも買っちゃいました。

地元のみなさんは“映画の街”である尾

道に誇りを持っていて、撮影で来た僕らを家族のように受け入れてくれました。尾道の美しさは、こうした人々が紡いできたもの。閉店後の〈尾道本通り商店街〉や、市役所前の何気ない船着場を作中に登場させたのも、街に流れる平凡で温かな日常を切り取ったからです。ああ、また尾道に行きたい。というより、帰りたい感覚に近いかな。僕の中ではもうふるさとなのかもしれません。

映画という共通言語のおかげで、出身地の北九州とも繋がりが深くなりました。「北九州国際映画祭」でプログラマーを務めさせていただいたり、火災から復活を遂げた映画館〈小倉昭和館〉の椅子に名前を刻んでいただいたり。幸せなことですね。いつか地元を舞台にガッツリ方言を使った作品を撮りたいな。心のふるさと・尾道でもまた撮りたい。『時をかける少女』は「尾道三部作」の1つだから、僕もあと2作？ 実現するかはさておき、お楽しみに。

from 下北沢

松居大悟さん



1985年、北九州市生まれ。下北沢を拠点に劇団ゴジゲンを主宰。2012年『アフロ田中』で長編映画監督デビュー。主な監督作は『パイプレイヤーズ』シリーズ、『私たちのハハハ』『くれなずめ』『ちょっと思い出しただけ』など。2025年6月に『リライト』、10月に擬人化焼肉漫画を推す腐女子が主人公の『ミーツ・ザ・ワールド』公開。自身の推しは雪駄とミンティア。最近は藤田嗣治も気になる。

Instagram : @daradaradayo

KITAKYUSHU
《OMISEYA SUN》

オリジナルTシャツ | レーシングフーディー
《OMISEYA SUN》
福岡県宗像市大島1011 umiba3F

YAMAGUCHI
《umu.》

original 刺繍ブラウス | upcycle 刺繍プルオーバー
《umu.》
山口県下関市大字吉見下2171

HIROSHIMA
《SHINOTEX》

デニムから出来た靴下 | ミニトートバッグ
《FUKUYAMA MONO SHOP》
広島県福山市元町 1-1 天満屋 福山店 5F

三都の雑貨物語

upcycle 染色ワンピース
《umu.》

「に着の服を選ぶってことは1つの生活を選ぶってこと」。〈Yohji Yamamoto〉のデザイナー・山本耀司氏のシビれる金言です。ファッションとは人生そのもの。だからこそ、つくり手の想いが詰まったものを丁寧に選びたいですね。そこで今回は、三都ならではの物語とともに纏える逸品を集めました。糸紡ぎから手織り、刺繍、染色までを一貫して手がけるのは、下関発ブランド〈umu.〉。似たようなモノがあふれる現代に疑問を持ち、色や素材の重なりから生まれる唯一無二の服を追求しています。古着をリメイクするupcycleのラインも魅力。〈SHINOTEX〉は、福山市のデニム製造会社（篠原テキスタイル）のオリジナルブランド。サステナブルな雑貨づくりに注力していて、製造工程で出るデニムの残糸を地元メーカーが編み立てた靴下や、ウガンダの綿花産業発展に寄与するデニムバッグなど、デザインも姿勢もクールです。宗像市の離島・大島の活性化を目指してオープンしたショップ〈OMISEYA SUN〉は、だ元（本田技研）デザイナーと、プラモデルメーカー（タミヤ）が運営。オリジナルのロゴ入りTシャツや限定フーディーは、マニアじゃなくても垂涎モノ。三都の物語と耀司氏のお言葉を胸に、シビれる人生を送っちゃいましょう。

N° 07

ドラマな服を纏うのだ！

「三都の雑貨物語」では、毎号ひとつのテーマに沿って集めたものと、それにまつわるエピソードをご紹介します。過去のものも公式Instagramにあるのでチェックしてみてください。 @ymfg_official

PHOTO_ 勝村祐紀 (広島県、北九州) TEXT_ 片桐絵都 EDIT_ 後藤麻尋



南場智子さん、 下関から世界へ羽ばたく 未来はつくれますか？

「この規模のイベントを継続していることが素晴らしい!」とSASを評価するのは、セッション登壇3度目となるDeNA会長・南場智子氏。世界を見据える南場氏は、この街の可能性をどう見たか？

南場智子

1986年マッキンゼー・アンド・カンパニーに入社しMBA取得後、同社役員に就任。1999年ディー・エヌ・エー設立。2019年デライト・ベンチャーズ創業。2021年より経団連のスタートアップ委員長。

Qー経営において地方と都心部では何が違う？

今、情報や距離といった物理的な差はほとんどないのではないのでしょうか。むしろ地方には長い間存在している課題がある。これはスタートアップにとって最高のチャンスです。起業家はその土地の特徴を生かし大暴れできる時代になっていると思います。

Qー海外に通じるスタートアップを育てるには？

地方というアイデンティティに縛られすぎず、世界に開くことが重要です。世界中から企業やVCを受け入れたり、留学生を積極的に送り出したり。人とお金とアイデアは、ボーダーを設けずにガラガラ動かすことがダイナミズムにつながります。AI分野に何十兆円もの投資が集まるサンフランシスコは、世界中から優秀な人材が流れ込み、結果、情報交換の機会も増えて、渦が加速しています。

Qー世界に目を向けた時、妥協してはならないのは？

質です。サンフランシスコの7割とか東京の8割とかを目指すのではなく、数や領域は狭くてもいいから、世界一を目指してほしい。そのために行政や財界も心をひとつにしなければなりませんし、ここは特別扱いするという政治的なコンセンサスも必要になります。こうした動きにおいては、コミュニティがミニマムで強固な地方の方が有利なのではないでしょうか。

Qー地銀には何ができる？

SASを継続して国際的なイベントにするのもひとつです。あとは街に才能が集まりやすい“制度”をつくるのも良いと思います。オースティンにスタートアップが集まる背景には、州所得税のないテキサスの制度がありますから。地銀は地方経済の中心ですし、そういった役割も担えるのではないかと期待します。

Qー行政や企業は何ができる？

優秀な人がこの街で暮らしたいと思うような報酬や住環境、ホスピタリティも欠かせません。教育が強い山口県なら、大学の得意な研究領域には世界トップの研究者を研究室ごと引き、ハーバードやMITよりも良い給料を出す。海外の人が懂れるような素敵な日本家屋を用意する。下関の英語対応を充実させる。物量が多い東京よりもやりやすいと思うんです。

Qー最近の事業テーマの見つけ方は？

テーマは意外と身近にあって、私たちの会社では日常生活での困りごとをアンケートでよく募集しています。そして今AIですべての産業が変わろうとしていますから、課題とAIを組み合わせてみるのも良いと思います。例えば、高齢化による地域課題に一番詳しい人とAIのエキスパートを集めて、二泊三日のハッカソンをしてみるのもいいですね。

Qー今の時代、起業家やリーダーはどうあるべき？

組織人ではなく、事業者であること。ずっと事業のことを考えていて、事業の領域について誰よりも詳しく、正しい方向へいち早く動き出せる人が成功すると思います。今の時代、アクションをしない方がリスクで、たとえ失敗してもその経験と知識を得た人の方が、未来を切り開けます。この街に何度か足を運ぶなかで、世界を席巻するスタートアップが生まれる可能性を強く感じています。どこかで起きている出来事ではなく、自分自身がその渦中にいるという意識で、ぜひ挑戦をしていただきたいです。

SAS皆勤賞です！



公式 Instagramでも発信中！

街の方々と交流する場所がつけられたらと思い、公式Instagramを開設しました。マガジンの内容はもちろん、誌面で紹介しきれなかった、街のあしたを照らしてくれそうな人や場所、取り組みも発信中です。みなさまからの情報、感想もお待ちしております。 #YMfg



@ymfg_official

YMfg VOL.12

2025年10月発行

発行：山口フィナンシャルグループ
お問い合わせ窓口：総合企画部
広報・IR室：伊藤・沖永・竹内・稲本
住所：山口県下関市竹崎町4-2-36
電話：083-223-5545

企画・制作：

ECD・TUGBOAT 企画：伊藤総研
編集：山崎若菜・吉川月華 (itskn)、後藤麻与
プロデューサー：天本季恵 (itskn)
エディトリアルデザイン：村田 録 (BROWN.DESIGN)
印刷：サンエムカラー

街にできた新しい施設から、YMFG 社員の働き方まで。YMFG 社員が明日につながる最新トピックスをお届け。

SHIMONOSEKI ADD-VENTURE SUMMIT 2025 三都から世界へ。あしたの変革者、下関に集結。

2025年7月30日、山口県下関市の海峡メッセで中四国最大級の地方共創サミット「Shimonoseki Add-venture Summit 2025」(通称SAS)が開催された。3回目となる今回は過去最多の約1,000人以上が参加。スタートアップは、ピッチに20社が登壇、ブースに10社が出展。県内スタートアップも参加した。ここでは会場で語られた未来像の一部を紹介する。

才能ではなく、しつこさが重要だ！



Boost Capital CEO 小澤隆生

立ち見が出るほど賑わう会場で行われたオープニングセッション。テーマ「非連続な成長を地方で実現するためには」で登壇した小澤氏は、M&AやAI活用が有効手段であると説き、「つくりたい世界を描く妄想力や人間力、執着力が重要」と語った。

地域から日本を変えていく



YMFG CEO 棕梨敬介

CEO棕梨の挨拶で開幕。3年前の約800人から年々来場者数が増えていることに触れ、「地域の課題解決を成長につなげる一つのエンジンになれば」と抱負を語った。続いて登壇した下関市長・前田晋太郎氏は、下関市が進める子育て支援施策が、地域企業の人材確保を支える一助となればと述べ、官民連携の姿勢を示した。

バックオフィスからの解放！



モクジツ CEO [山口県] 加藤潤一

フリーランスとの契約から支払いまでの業務を効率化させるクラウドサービス「BackSimp」を開発・提供。AIエージェントやSlack連携などを次々と実装。CEOの加藤はYMFGが主催するアクセラレータープログラム「ミライズ」に参加。

AI社長で自走する組織へ！



THA CEO [東京都] 西山朝子

経営者の価値観や理念をAIに反映させ、従業員が相談・判断に活用できるチャット型サービス「AI社長」を提供。中小企業の社長依存やノウハウ伝達不足にアプローチ。SASのセッションで、社外展開の可能性についても言及された。

ものづくりをDX！



ミラリンク CEO [福岡県] 佐取直拓

テクノロジーにより誰もが自由にものづくりできる世界を目指す「ミラリンク」の佐取氏は、製造業の設計者向けAIシステム「タグット」を紹介。企業のノウハウをAIが管理することで、業務のミスを防ぎ、効率化と標準化を実現する未来を語った。

現場の業務を一元管理できます！



会場には自社プロダクトを展示するブースも設けられ、県内外から38社の注目サービスが並んだ。東京を拠点とする企業と地域企業の交流も見られた。

セッションは全4テーマ総勢13名の有識者が登壇！



今回のSASでは、スタートアップと連携実績を持つ地域企業も登壇。「地域企業とスタートアップの連携」や「新しい事業承継の形」をテーマに、経験に基づく実践につながる視点が語られた。セッションの詳細は、次号の「YMfg」で紹介する。



鉄に花、人に詩。



「北九州の鉄工場」の生々しさ・美しさを、
手に取り感じることができる

EDGE LANDの「鉄の一輪挿し」

内容：サイズ S 2本：約100g 約35mm×10mm×25mm φ2.5
M 2本：約250g 約25mm×25mm×70mm φ2.5
L 1本：約650g 約45mm×25mm×75mm φ2.5
商品：価格 鉄の一輪挿し5本セット：¥12,800（税込）